巻頭言

大学教員の授業力

スポーツ健康科学部学部長・教授
村松常司

現在、桜美林大学の教授である諸星裕先生は、日本の大学（国際基督教大学）を卒業後、渡米し、修士、博士課程（学術博士）を修了し、彼の地で大学教員として第一歩を歩みだしました。そして、准教授３年目の終わりに、学部長による年度末評価面接で「君の採用は来年で終わりかもしれない」と言われました。諸星氏は、大いに学術研究をやり、授業（教育）もノルマを果たしていたと思っていましたから、驚いてその理由を問いました。学部長の回答は、「君のティーチングの評価が低い」というもので、「君は、来年は人にものを教えることを勉強しなさい」と指摘されたそうです。そこで、学部長の助言をもとに、学生評価による「プロフェッサー・オブ・ザ・イヤー」の授業を見学したり、同僚にも素直に疑問点を聞くことを通して教育技術を学んだそうです。諸星氏は、「その当時、学術研究はしていたが、自分がいかに教える方法、テクニック、学生のこころを知らなかったかを思い知らされました」と述べています。こうして多くの教育技術を学び、後日、みごと「プロフェッサー・オブ・ザ・イヤー」に選ばれたことが著書[1)]に記してありました。このことは大学教員の資質の一つとして授業力がいかに大切かを示しています。これは米国での話ですが、日本においても、近年、授業力向上への関心が次第に大きくなっています。

我が国の大学にシラバスの導入が始まって久しいことは周知のことであり、すべての大学がシラバス作成に知恵を絞っていると思います。シラバスはご存じの通り、15回の授業の計画と評価のポイントが示されており、大学にとっても学生にとっても大切なものであります。そのシラバスがどう作成されているか、それに基づいて行われた授業にどういう工夫が施されているか、行われた授業が教員自らそして学生からどう評価され、その結果がその後にどう生かされるか、の証拠（エビデンス）を詳らかにすることも要請されてきています。諸星氏の指摘のように、評価の高い先生の授業を研究することはもちろんのこと、研究分野の異なる先生の授業や工夫を知ることも必要となるでしょう。

これらの社会的要請や個々の教員のファカルティ・ディベロップメント（FD）のため、スポーツ健康科学部では、平成27年度から教育研究紀要を発刊し、これまで２号で計35編の論文が発表されています。本年度からは全学規模での教育研究紀要が作成されることになり、ここに東海学園大学教育研究紀要第１巻の発刊の運びとなりました。本号には16編の論文が掲載されております。研究分野を問わず、先生方の論文を一読頂き、授業力の向上のための切磋琢磨に資することを希望します。

参考文献

１）諸星裕（2008）：学生にマッチした授業とは、消える大学・残る大学、集英社、東京